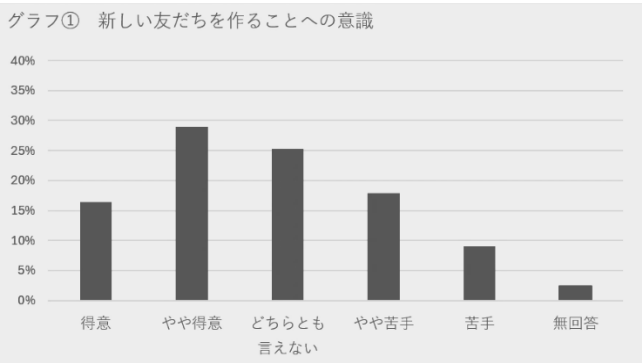
イマドキのコミュニケーションに対する意識調査

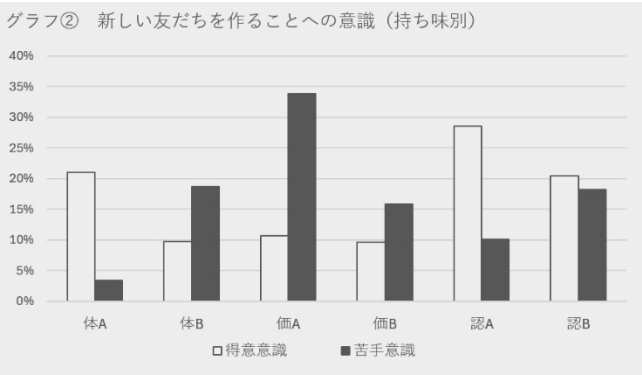
学校において、人間関係の悩みを抱える子ども達は少なくありません。ネットやSNSの情報を見てみると、「新学期に友達ができない」「友達と一緒にいると疲れる」など、多くの悩みが寄せられています。また、クレペリン検査の説明会で私たちが先生方からのお話を聞いていると、「いつも一人で読書をしている」「ボタン一つの掛け違いが大ごとになる」といった子ども達の対人関係・コミュニケーションに対する不安の声をよく耳にします。

今回はSKKが独自に調査した中学生および高校生約22,000名のアンケート結果をもとに、イマドキの生徒たちのコミュニケーションに対する意識について紹介していきます。



まずは友達作りに対する意識調査を行いました。その結果がグラフ①です。

約半数は得意（「得意」「やや得意」と回答）だと思っており、約3割は苦手（「苦手」「やや苦手」と回答）だと思っていることから、得意意識を持っている生徒が比較的多いことがわかりました。さらに「どちらとも言えない」が約25%出現していることからも、生徒たちは世の中で言われているほど友達作りに苦手意識を持っているわけではない、と読み取ることができそうです。

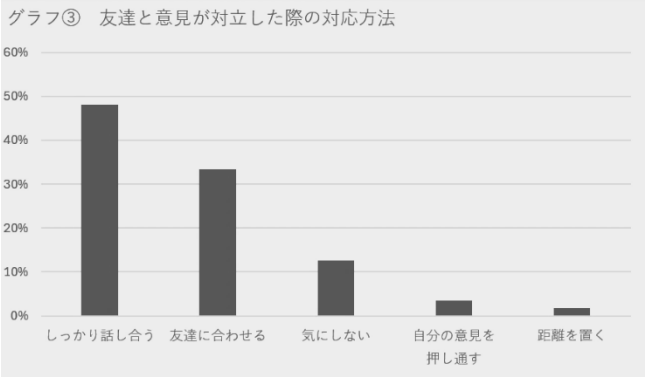


次に、クレペリン検査の側面でもある〈持ち味（いわゆる性格）〉ごとに分析を行いました。その結果がグラフ②です。

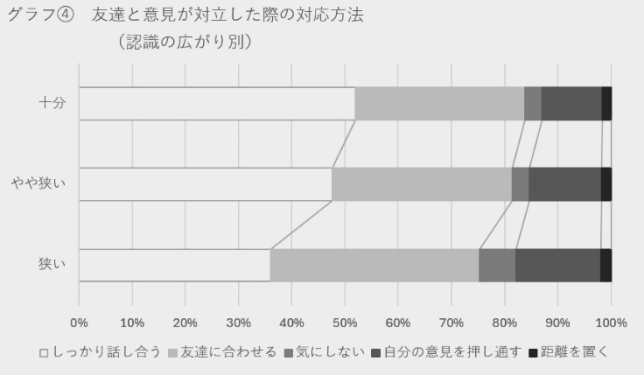
友達作りに対して、得意意識が強く見られたのは体A・認Aです。体Aは明るく社交的な面が、認Aはリアクションの速さや積極的な面が良い影響を与えているようです。どちらも新学期などの集団形成の初期段階では、クラスの中心となって活躍しているような場面も多く見られます。

一方で、顕著に苦手意識を持っているのが価Aです。感受性豊かで、思索の深さが長所ですが、新しい環境においては対人的な緊張感を強く抱きやすいタイプでもあります。そのため、最初の段階で関係性を築けずに躓いてしまうと、なかなか立ち直れずに孤立してしまう場合があります。リラックスさせられるような声かけをしながら、学校生活における安心感を持たせ、役割交流や係活動、行事や部活動を通して、趣味や話の合う友達ができると深く

交流していくことができます。
　持ち味に良し悪しはありませんが、旗振り役などクラスの中心として力を発揮するタイプもいれば、控えめで目立たないものの、縁の下の力持ちとして活躍するタイプもいます。場面によってアドバンテージが違ってきますから、それぞれの強みを活かしていきたいところです。

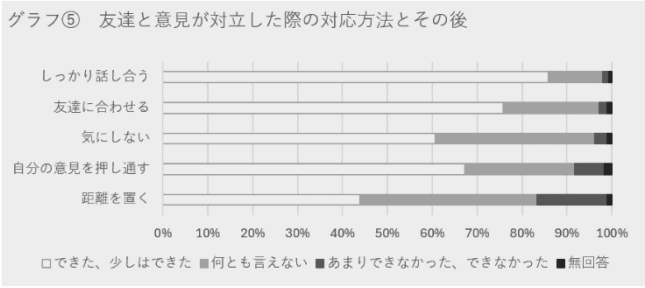


　次に友達と意見が対立した際にどのような対応方法をとるのかについても見ていきましょう。（グラフ③）
　「しっかり話し合う」が約半数を占めており、話し合いでしっかりと解決を図ろうとしている生徒が多いことがわかります。また、3割強の生徒が「友達に合わせる」という方法をとっています。両者の共通点として、対人関係を大切にする振る舞いをしていることが挙げられます。



　次に、クレペリン検査の側面である〈認識の広がり（周囲の状況や、様々な物事を認識したり把握したりする力）〉と対応方法の関係についても調査しました。その結果がグラフ④です。
　認識の広がりが「十分」に近づくほど「しっかり話し合う」の割合が増え、「狭い」に近づくほど「相手に合わせる」の割合が増加しています。
　「相手に合わせる」という方法は、物事の判断を相手に委ねることで波風を立てることなく、関係性を維持する生徒なりの処世術とも言えるかもしれません。一方で、認識の広がりが「狭い」ことから、物事の理解に時間がかかったり、視野の狭さが見られたりして、「話のスピードについていくことができない」「意見を出すにはまだ力が足りていない」ために、相手に合わせることでその場をやりすごさざるを得なくなっていることも考えられます。

　さらにその対応をとったことで問題を解決することができたのか、調査したのがグラフ⑤です。



多くの選択肢で、6割以上は解決に向かうことができたと回答していましたが、「距離を置く」だけは4割しか解決に向かわなかったと回答しています。意見が対立した際、双方が納得して解決するためには、お互いの意見を理解し、お互いに譲歩できる部分を見出していくことが重要です。この解決のプロセスを考えると「意見が異なるから相手と距離を置く」というのはなるべく回避すべき対応だと思われますが、なぜ生徒たちはそのような対応をとってしまうのでしょうか。

あくまでも推測ですが、生徒たちのなかに「真正面からぶつかって相手を否定したり、自分が否定されたりするようなことをするくらいなら、相手と距離をとって問題をあいまいにしたまま放っておこう」という考えがあるのではないでしょうか。前述の「相手に合わせる」という方法と同様に生徒なりの処世術であり、そうせざるを得ない状況もあるのかもしれません。このような状況下で、生徒だけで解決を目指すのは難しいため、先生が仲介に入るなど、積極的なフォローが必要になりそうです。

まとめ

今回は中学生および高校生の回答データをもとにイマドキの生徒たちのコミュニケーションに対する意識や、友達と意見が対立した際の対応についてまとめてみました。

全体的には世の中で言われているほどコミュニケーションに対する苦手意識は色濃くないものの、〈持ち味〉によって得意意識、苦手意識が顕著であることがわかりました。個人の良さを最大限発揮できる場を設けながら、学級運営をしていくことが必要になりそうです。さらに、友達と意見が対立した際には、問題解決に向けて「話し合う」という建設的なやり取りをしている生徒が多いこともわかりました。ただし、〈認識の広がり〉によっては話し合うよりも、相手に合わせることでその場をしのいでいる状況も見受けられ、行動ぶりには大きな違いが生まれているようです。

認識の広がりを伸ばすためには他者との関わり、時にぶつかり合うことが必要不可欠です。「苦手だから」「相手と意見が違うのは怖いから」と避けて通ることは、成長するチャンスを逸してしまうことになりかねません。だからこそ先生が積極的に介入し、コミュニケーションに苦手意識を持っている生徒にも無理のない範囲でトライさせてみること、経験を積ませることが大切です。そのためにも先生方には一人ひとりに合った丁寧なフォローが求められているのではないでしょうか。

・許可なく別媒体への掲載や、アップロードはご遠慮ください。

・引用もしくは参考文献としての利用をご希望される場合は、お手数ですがNPO法人メンタルぷらす協会Reforest事務局までご連絡ください。

Copyright NPO法人メンタルぷらす協会 Reforest